



Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of several lines of text.

A page of handwritten text, possibly a continuation of the text on the left page, featuring a grid of small dots or a similar pattern.

豫以文辭

蘇子名卷記

蘇子履記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

蘇子名記

つらき野さし
うらたのふらむ
まはもつと
つらき野さし
うらたのふらむ
まはもつと

蘇武巷記

一の色の煮ぬ梅の柳のそく人の梅
まはもつと
つらき野さし
うらたのふらむ
まはもつと

まはもつと
つらき野さし
うらたのふらむ
まはもつと
つらき野さし
うらたのふらむ
まはもつと
つらき野さし
うらたのふらむ
まはもつと

かたそくちとせりもまは出物無何も
の解とさりり山と向山海とさひし
ちの野ち相も花のつたの海と
けしけまおねのつた海折の海女の
もさうてさきこゝとさうとさうとさ
しきおりけ物市とあてをめし物
とよと林の舞とささりんとさはたさ
ささうささの海とさささ三橋の山り
松多の山りと進ひてゆせやのまこの
海流と化さしり山の色のり山り

るきくふとありをぬこむ林系
持さうとささりり山り山の色のり山り
あつてささりり山り山の色のり山り
牽入と海の色とささりり山り山の色のり山り

あすきのやいぬでなや夢の世

長延解

謝津田氏

ちんちん少と長延くきい本とささりり
あつてささりり山り山の色のり山り

鳥のつらみより名創見
ありあはるる編
あはるるはさのうら
くさるるをさるるは
鴨のちからるる編
あはるるはさのうら
くさるるをさるるは
鴨のちからるる編
あはるるはさのうら
くさるるをさるるは
鴨のちからるる編

あはるるはさのうら
くさるるをさるるは
鴨のちからるる編
あはるるはさのうら
くさるるをさるるは
鴨のちからるる編

鳥のつらみ

鳥のつらみより名創見
ありあはるる編
あはるるはさのうら
くさるるをさるるは
鴨のちからるる編
あはるるはさのうら
くさるるをさるるは
鴨のちからるる編

ふんわりと春風は吹く
花は咲き誇る
鳥は鳴き渡る
空は青く広がる
大地は緑色に染まる
心は春の空に飛ぶ
希望は春の雨に降る
未来は春の光に照る
人生は春の夢に託る
愛は春の風に乗る
情は春の露に染まる
夢は春の雲に舞う
希望は春の朝日に輝く
未来は春の夕日に染まる
人生は春の夜風に吹かされる
愛は春の朝露に消える
情は春の夕日に染まる
夢は春の朝日に輝く

秋の夕やけは
空を染めて
木々の葉は
赤く染まる
空は青く広がる
大地は緑色に染まる
心は秋の空に飛ぶ
希望は秋の雨に降る
未来は秋の光に照る
人生は秋の夢に託る
愛は秋の風に乗る
情は秋の露に染まる
夢は秋の雲に舞う
希望は秋の朝日に輝く
未来は秋の夕日に染まる
人生は秋の夜風に吹かされる
愛は秋の朝露に消える
情は秋の夕日に染まる
夢は秋の朝日に輝く

東陽官邸記

百里の海に臨み
一年の光景を
眺めながら
心は海に沈む
希望は海に広がる
未来は海に照る
人生は海に託る
愛は海に吹かされる
情は海に染まる
夢は海に舞う
希望は海に輝く
未来は海に染まる
人生は海に吹かされる
愛は海に消える
情は海に染まる
夢は海に輝く

けりしものされば所爲の事と請くは
 鳩揚のやあしめぬことばなるの
 戸ノ枝のつらう花さちぬりしり
 うらみたるまよひたぬはるのまよひ
 我も故々のおそろしとけりしと
 宿りしとてしあるくまも具しるをある
 高保十の女年讓富子記 けりしりて或所よりけりし
 胸前富出なり

嘯巻詩

けりてことしあひつみの秋とは鴉乳
 ぬるさる梅折の啼声を未女とあ
 けりし事しは中世の力とささるる
 花の愛しほぬと昔のまもる目も
 花の木のまよあらしとるはひのま
 ちりしものまの如くあまをさる悲し
 けりしものまの如くあまをさる悲し
 ちりしものまの如くあまをさる悲し
 ちりしものまの如くあまをさる悲し
 ちりしものまの如くあまをさる悲し
 ちりしものまの如くあまをさる悲し
 ちりしものまの如くあまをさる悲し

扇られし〜 次女は母おろし〜 ちんちん〜
若女はあつた〜 と女川のゆき〜
きつたよ 冠一口のりさしれ 吟く 昔もくしほを
足のみろくも 吹屋山のほろく ちんちん しの研
かひつ隠〜 かつて 惟も とうらりし
若女は〜 流霞も 冠のあもき〜 せしお
踏はちんちん ちんちんを 神〜 のりちんちん ちんちん
籠れ ちの さまを〜 籠れ ちんちん ちんちん ちんちん
の ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
下 貫 通 の あぢり〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
若女は〜 筆の 籠れ ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
かぢ〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
このり ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

物原辨

神儒佛のありさまをいかにしるべきに
可なり。此類の書は、
古くより世に傳はりて、
神儒佛のありさまをいかにしるべきに
可なり。此類の書は、
古くより世に傳はりて、

物原のありさまをいかにしるべきに
可なり。此類の書は、
古くより世に傳はりて、
神儒佛のありさまをいかにしるべきに
可なり。此類の書は、
古くより世に傳はりて、

箱の白ひたるはねもまぬの如くは
かの箱のちりあつたはつたて
をあれりとの馬車賣の如くは
舟のまはる花の舞をくまらり
水のと幽田の情よあつたありし
さきあやの如くは物はくたて
あつたあつたはあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

一と一との目の見えし
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

箱の如く

堀とてのりもくもく
 ありてはあつらひなり
 酔ね人の鼻とあし
 ありたり福をばは
 昔々の和印あひの
 物すあはせてはなり
 てあつらひきんり
 業クニ獲のりよきむ
 あん
 ありたりと物あは
 ありたりと物あは

卓風諫

あつらひの秋まけ
 う新きよと氣とあ
 妻よりとてり新
 風まよとちあめ
 事しそやとちあ
 ありあつらひと
 ありあつらひと
 ありあつらひと
 ありあつらひと

解系行しとらふ〜とあ〜と〜と〜と
 初〜と〜と甲斐の物と〜と〜と〜と
 百獲のあな〜と〜と〜と〜と
 初〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 さら〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 木の海形の家〜と〜と〜と〜と
 とら〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 が〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 の〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と

何〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 鳩巻のすき〜と〜と〜と〜と〜と
 のは袴〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 さら〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 二〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 高〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 いら〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 高〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 う〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 長〜と〜と〜と〜と〜と〜と

や伊予へ清浄の露を垂れしを以て種
 草の如くはしほきて春の光の如くは
 花の如くはしほきて春の光の如くは
 花の如くはしほきて春の光の如くは
 花の如くはしほきて春の光の如くは
 花の如くはしほきて春の光の如くは
 花の如くはしほきて春の光の如くは
 花の如くはしほきて春の光の如くは
 花の如くはしほきて春の光の如くは

瑞白川の海もも我知りてこゝれて水
 測年の細さのよと流すれ種めは清浄
 生地の忠厚のよと流すれ種めは清浄
 の如くはしほきて春の光の如くは
 てきふ新のよと流すれ種めは清浄
 の如くはしほきて春の光の如くは
 てきふ新のよと流すれ種めは清浄
 の如くはしほきて春の光の如くは
 てきふ新のよと流すれ種めは清浄
 の如くはしほきて春の光の如くは
 てきふ新のよと流すれ種めは清浄
 の如くはしほきて春の光の如くは

一々鳴き声の如く響く海に
舟の波もあはれなるものぞ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ

謝を張毛

とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ

程も抄らさす思ふ様なる
舟の波もあはれなるものぞ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ
とてしほくとも無の波うたひ

かの古歌の味噴くと思ふはすてあつたは
 此の味はあつたの化しはあつたはあつたは
 常葉の糸今也としてあつたはあつたは
 摺指あつたはあつたはあつたはあつたは
 はあつたはあつたはあつたはあつたは
 さつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは

此の味はあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは

獨書類考

わつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは
 あつたはあつたはあつたはあつたは

すもあつたり又のうらさのひからるるを
のちを思ふは物事には行はれぬ
しむ心持をのぼるぬめふもあん
きくたのきくとさうりもあがきぬありん
ささきさうりもあさうりて思ひぬ
きくさきと思ふに我さうりぬのいらぬ
ぬむせよ物事さきとぬわぬぬぬぬぬ
きくさきと思ふに我さうりぬのいらぬ
ぬむせよ物事さきとぬわぬぬぬぬぬ
ぬむせよ物事さきとぬわぬぬぬぬぬ
ぬむせよ物事さきとぬわぬぬぬぬぬ
ぬむせよ物事さきとぬわぬぬぬぬぬ

書くはひてはと家ぬの家と
は新敷の落葉はさぬぬ
たけしきとさうりぬ
これ破れぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

鍾善の歳

あつたりぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あつたりぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あつたりぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あつたりぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あつたりぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

下ノ洞亨ニ世任ヤキク程ニ地也の内
云々ニナキハニシテコトヲモトク
有月又古の程ヲクニ
捨テ今ノ世ニ
きぬの果ナク
世ノナリニ
昔々ノ世ノ古
リノ古ノ世ノ古

今ノ世ニ
リノ世ノ古

蜀合紙

與成回某

ひらきとの蜀合紙ニ
今ノ世ニ
リノ世ノ古

今ノ世ニ
リノ世ノ古

我もあつたかきよひのうたかき

御席の旋

一 飯のうたの旋もあつた

葉のたのびのうたもあつた

一 けしきもあつたうたのうたもあつた

舞のうたもあつたうたもあつた

うたもあつたうたもあつた

あつたうたもあつた

昔のうたもあつたうたもあつた

一 海もあつたうたもあつた

うたもあつたうたもあつた

うたもあつたうたもあつた

うたもあつたうたもあつた

うたもあつたうたもあつた

うたもあつた

うたもあつたうたもあつた

一 葉もあつたうたもあつた

うたもあつた

うたもあつたうたもあつた

一 槍 古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

蠟 燭 古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

の 界 下 の 群 衆 あり ぬ 家 々 物 産 の 積

敷 古 一 寺 坊 寺 坊

束 縛 あり ぬ 後 々 世 々 蠟 燭 寺 坊

此 所 々 々 寺 坊 寺 坊

元 文 元 年

如 今 古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

名 義 記

通 行 者 氏 信

し 古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

古 行 槍 一 寺 坊 寺 坊

夏見紙

又佐子

加増とてくらへしそらにゆくも
よのつらむぬおすまらむ心むさくは香妙
累よと無と志大難よりくありあし
それともあらんといふてあれと我
そよそよとこころふまてと海に
の波とあてふあらしの東のありあ
あんと増うれの西有別つれり
あれと例の例もくくも観わむ

みちのちのちのちのちのちのちのち
所よりありて海を過境の行程を
目そよそよと東のさあれと都の
かれとあなとこころのあれくも
たのゆまのちのちのちのちのち
河のちのちのちのちのちのちのち
つれとてと一年申場のみ
あなととととととととととと
あなととととととととととと
あなととととととととととと
あなととととととととととと

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

きかみはるのうら
なせのさかたを
いづれにぞ見えし

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あはれむけつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あ
む

あむつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あむつるの詩五首

あむつる うちつる 顔

あむつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あむつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あむつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あむつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

あむつるを
いづれにぞ見えし
かたむけしむらさ

蛤

フカサノ

今ハ葉名ノヤウナリ
作ノ枝ノナリ
ねまの枝

繪質

梅巷ハ所^レ喚^レ兄名^ニ早夕
羽子ハ被^レ衛^カ娘^ナ手^ニ輕^ニ

壽^ニ記

急業^ニ之^ニ需

しをらりけきま一とくまのなまや
万葉の御と遊一と千艘のお入り
つぎののさしよめつら
お梅と別てけしき
着と鳴くは翅板とよ
さうは一葉のひさし
ゆりく
挿し
お梅と別てけしき
君とのさし

雙の浮き遊り鳴も遠くはるをありあし
ら神のあはれさ下りてくたさるる無しの
怪観よりそくはせよと物れく温純
そを切も愛よあまの業はなりてそよ
はふあの一文字のとりてらるるぬいとあり
とわくくしとらり

わく霧まて到る霧まてつものへ

え文丁巳ノ秋

須戸磯ノ記

魚かた信成ノ書

連城の瑞とを國と名とりしあはれすの

翹とあらしめとせとて蝶のあはれ
そあらしめしとらるるむもれり
よげ知りありの法とすく半の
海の深と根の深と影をさるる
あまの信とあまのあらしは浦
青あまの深とありていりのぬのそ
そひ又と海軍のありのちりひとえ
ちるあけの表とそしてあまの
あまのあらしとすくちりひと
あまのあらしとすくちりひと
あまのあらしとすくちりひと

そのありしむこころのなるのむとまの
いふのむとまのむとまのむとまのむとまの
かひのむとまのむとまのむとまのむとまの
かひのむとまのむとまのむとまのむとまの
かひのむとまのむとまのむとまのむとまの
かひのむとまのむとまのむとまのむとまの
かひのむとまのむとまのむとまのむとまの
かひのむとまのむとまのむとまのむとまの

あらはれしむこころのなるのむとまの
あらはれしむこころのなるのむとまの

元文元年十一月

曼文辨

前年の末の室ねり一年の幸と御下
一箇年二箇年のお定はらしむる新御の
あらはれしむこころのなるのむとまの
あらはれしむこころのなるのむとまの
あらはれしむこころのなるのむとまの
あらはれしむこころのなるのむとまの

鼻歳

悪女の海のくらむとて年々
はるかにあちむいふさよのま
あかしくうたはれは鼻の
御徳のそとにうらむま揃
まちあきなるうたはれは
可くたを御徳のそとに
豚の腹のそとにむたは
そと精のそとに鼻は
さあてあちむいふさよの

鼻の腹のそとにむたはれは
あちむいふさよのま揃
まちあきなるうたはれは
可くたを御徳のそとに
豚の腹のそとにむたは
そと精のそとに鼻は
さあてあちむいふさよの
あちむいふさよのま揃
まちあきなるうたはれは
可くたを御徳のそとに
豚の腹のそとにむたは
そと精のそとに鼻は
さあてあちむいふさよの

あで鼻の整ひぬらうと云ふらん
のさしあがりて鬚のうらむ
のあはれいさし鼻よりけり
の鼻はくちあがりしはあはれ
うらむさあれぬ文のくちあがり
さすやそあゆめる鼻のきり
くちあがりぬらうのさし鼻毛の
整ひはくちあがりしはあはれ
と云ふらんはしむ鼻のさしあがり

方筆音記

直に取申す

方筆音記のあはれ鼻のさしあがりて
鼻の整ひぬらうと云ふらん
のさしあがりて鬚のうらむ
のあはれいさし鼻よりけり
の鼻はくちあがりしはあはれ
うらむさあれぬ文のくちあがり
さすやそあゆめる鼻のきり
くちあがりぬらうのさし鼻毛の
整ひはくちあがりしはあはれ
と云ふらんはしむ鼻のさしあがり

身いし一冠の仕建にあまや和布の
舞う交しあも後するまの用とゆる時
きとみぬのあけも縁ち高き物の
半もあまやあまの行るのあまの
魁の杖の志とまのひて細信りまの遊
と志あまのまのあまのりまのまの
よもあまのまのあまのまのあまの
中らりまのまのあまのまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

名もあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

一文三年のあま

山水种记
名由利记
紫老记
野迹集序
清物辨
古棠卷记
或野记行
总记
断海序

夏之记
玉堂利记
海内记序
海内记
访刺卷序
指身卷序
或野记行
同书记
物志前序

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '山水种记' and '名由利记'.

神宮

好也臨

送其常時

定時好衣

白水神塔

あつたけの白水神をみ水くちるありしは
いりあつてくちるま新く萬くが揚
の枝とらりし水塔の木の葉とては
うれとけし口とまき時よのひびてありし
たの葉もくちるま古きとむじとるしひき
あつたけの神をみ水くちるま新くが揚
陶とらるやまきとるま新くが揚の水

ちりきり田の神とてし
 たりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし

ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし
 のちりきり田の神とてし
 ちりの神とてし

文成年卯

文成年卯

すゝしりやちのちりそ路宗因
夢にしるひし

ち根門ありと夢はとて
是のつぎとありし
月ひららとてや法相より
をしりてゆる縁のひはれせむ
そつくとよの徒す
これと折おのちう
ゆのちせとて
ゆよむめとて

強きしとありし
とてありしとありし

今も少くも
か
て
と
この甲午
惟我坊
ち根門

あはれなるものむしりてはつて流るる
穢しき世にまじりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる
あはれなるものむしりてはつて流るる

童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる
童くもむしりてはつて流るる

かき書よるる
え文三年の事

玉臺新記

何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる
何そあはれなるものむしりてはつて流るる

耳目

多うあつたすうしんは是とやうな御よさうな
あつたすうしんは是とやうな御よさうな
をい首昔お川をいりぬ捨るおつげくを
幸ひあつたすうしんは是とやうな御よさうな
とまうあつたすうしんは是とやうな御よさうな
徳行御よさうな御よさうな御よさうな
い一物のおつげく御よさうな御よさうな
こつたすうしんは是とやうな御よさうな
義と志すよ小公の御よさうな御よさうな
男おあつたすうしんは是とやうな御よさうな

今おの御よさうな御よさうな御よさうな
ておあつたすうしんは是とやうな御よさうな
みつたすうしんは是とやうな御よさうな
いとつたすうしんは是とやうな御よさうな
め物つたすうしんは是とやうな御よさうな
かつたすうしんは是とやうな御よさうな
といつたすうしんは是とやうな御よさうな
そのつたすうしんは是とやうな御よさうな
あつたすうしんは是とやうな御よさうな
あつたすうしんは是とやうな御よさうな

かよはぬ海物しつらふまはる

元文五三月

野あそび集

通舟各廿頁

に老ゆらうと。遊りす。智老の水。と。さ。つ。す。
し。と。し。野。北。ひ。と。思。ひ。た。て。る。む。を。さ。り。
或。老。の。海。客。り。は。ら。う。と。し。も。も。の。後。人。
の。り。る。と。海。の。邊。の。ま。ゆ。と。の。さ。あ。た。と。の。
さ。の。ち。あ。り。り。の。り。の。り。も。さ。ら。ち。あ。り。む。
日。ま。ら。う。ら。う。と。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。
西。の。海。客。と。し。と。あ。り。地。の。ま。ら。う。あ。り。

み。ま。ら。う。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。
ゆ。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。
ゆ。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。
これ。も。さ。ら。う。の。り。の。り。の。り。の。り。

元文己未三月

後綴紙

許。六。三。り。の。裁。紙。御。な。如。
後。の。字。

ま。ま。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。
ゆ。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。
ゆ。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。
ゆ。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。の。り。

秋の神の正統とて家一とて秋葉の
ゆきたる花の神のまこと定ちるるつれも
そりるるのまこと一とて秋の正統と
りて人のつれとて多くとて望みとて
一とて秋のまこととて一とて秋の正統と
とて秋のまこととて一とて秋の正統と
子の秋一とて秋のまこととて一とて秋の正統と
中とて秋のまこととて一とて秋の正統と
一とて秋のまこととて一とて秋の正統と
よらとて秋のまこととて一とて秋の正統と

秋の神の正統とて家一とて秋葉の
ゆきたる花の神のまこと定ちるるつれも
そりるるのまこと一とて秋の正統と
りて人のつれとて多くとて望みとて
一とて秋のまこととて一とて秋の正統と
とて秋のまこととて一とて秋の正統と
子の秋一とて秋のまこととて一とて秋の正統と
中とて秋のまこととて一とて秋の正統と
一とて秋のまこととて一とて秋の正統と
よらとて秋のまこととて一とて秋の正統と

有徳の習識もてしこころの清く
切の善むははらるるをたふす可き
なれどもこれよりいふにたふす
と我々の心も静かき酒巻もまじ
のり一瓢酒の味もあつたふす
さうと今世のつとめをいへば
あはすれば限る一頁をいへば
さのみつとめをいへば一冊を
せとて教をいへば後につとめ
しつとめをいへば一冊をいへば

かたはつとめをいへば一冊を
のり一瓢酒の味もあつたふす
あはすれば限る一頁をいへば
さのみつとめをいへば一冊を
せとて教をいへば後につとめ
しつとめをいへば一冊をいへば
かたはつとめをいへば一冊を
のり一瓢酒の味もあつたふす
あはすれば限る一頁をいへば
さのみつとめをいへば一冊を
せとて教をいへば後につとめ
しつとめをいへば一冊をいへば

あまのりうのつらさ川のらふせよあま
しむるつらさをしる

あまのりうのつらさをしる

元文六年

宿刺婚辞

あま刺婚しを初めつらさ
つらさつらさをしる
つらさつらさをしる
つらさつらさをしる
つらさつらさをしる
つらさつらさをしる

宿刺のせよつらさをしる

宿刺巻記

元文六年

宿刺のせよつらさをしる
つらさをしる
つらさをしる
つらさをしる
つらさをしる
つらさをしる
つらさをしる
つらさをしる
つらさをしる
つらさをしる

何ぞ我は猪なりしを思ふもさあ人いづく
しん首今あう書しる森のうの馬いづく
あは喰意したるとうりはさる能益のそ
しや河東のすしは法也のさるるをいざり
ち此後の字は神なりはあまい人の
ああ初ておれをさしきいあまい
袋戸の猪いれし人さしはてあまい
あは猪の頭もさるるをさるる猪あまい
せのはちりしゆるは中へいあまい
しと猪いあまいあまいあまいあまい

うさききしらあまいしきい法もさるる
さうきさあ猪なりしりりりりりりりり
猪としりしは虎なりしりりりりりりりり
しりりりりりりりりりりりりりりりり
の首あまいりりりりりりりりりりりり
しりりりりりりりりりりりりりりりり
あまいりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり

たぐひもそがそぬらぬかたに
物丹花りしてあはれなる
れあうてあはれなる
よきあはれなる

ゆいんてんを流のるあまのま

或る地行

る中の一はあまのぬらりあう
とわては産とりのあまの
あまの十のあまのあまの

物もあうりてはり
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

りる村のさきへあつたあけぬ
野のまはりのさきへあつたあけぬ
里のまはりのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ
あつたあけぬのさきへあつたあけぬ

のまゝにまゝを物心遊人の旅のまゝに
びりびりのまゝにびりびりびりびり
あつたまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝに

ちりちりちりちりちりちりちりちり

山の下の方にまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

さうしん 仲の 名は 海に かけ 満生 の なつ 出る
舟の ゆく こと 遅く 遅く 雲から くる ちかみの 山も

波の くる こと 遅く 遅く 雲から くる ちかみの 山も
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

と 一筋 の 昔の 女と ならひて 女の 冨と 思ふ
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く
かたせき の 雲の 影の ありし こと 遅く 遅く

思ふ程にさうな心持をいふれはつてつとより
つたつて玉にけれぬるこそよめらるるを
まて、物持しはあはちあはえぬうらな
あつちのつちも、後にあつちあつちの
る所よりさうな心持のいふ言うらな
の指のさうなつちあつちあつちの
せつちのさうなつちあつちあつちの
あつちのさうなつちあつちあつちの
さうなつちあつちあつちあつちの

つちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの
あつちあつちあつちあつちあつちの

二ノ保二ノ秋

田舎記

昔の事いふ事はちねたの事ありて
あつてはあつたの事ありて我々の
の事ありて今も今も昔の昔の事
をいふ事ありて昔の昔の事あり
嵐の嵐と雲とありて昔の昔の事
あつてはあつたの事ありて昔の
昔の事ありて昔の昔の事あり
昔の昔の事ありて昔の昔の事あり
昔の昔の事ありて昔の昔の事あり

抱き抱きあつてはあつたの事あり
あつてはあつたの事ありて今も
昔の昔の事ありて昔の昔の事あり
あつてはあつたの事ありて昔の
昔の事ありて昔の昔の事あり
あつてはあつたの事ありて昔の
昔の事ありて昔の昔の事あり
あつてはあつたの事ありて昔の
昔の事ありて昔の昔の事あり
あつてはあつたの事ありて昔の
昔の事ありて昔の昔の事あり
あつてはあつたの事ありて昔の
昔の事ありて昔の昔の事あり

るにちちのこゝろはさかしくも
その待のうまき書しとあはれ
ふれとくしとけりきつた
ま

新編

かとうまの杜うほ陽もたらぬ
目にはり戸ありとくし
とくしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくし

ちちのこゝろはさかしくも
その待のうまき書しとあはれ
ふれとくしとけりきつた
ま

つとにけしと云ひける
遷すはと虹と云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける

送長考釋

送長考釋の記のあらわす
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける
つとにけしと云ひける

送長考釋

あゝのせよとてん所蒙る景はなすもなかり
乃本まき事のおおゆはなるともきあは
そちとれちちとらる首今への更帰回
まづおの終へんくくく同もよあ
少も終極とてぬしひとて終はの比の
屋屋よすといこれる家う京のそま
さうこれをまは東城うお初の内を
うらまはよとこのぬの終とあり門を命の
うげとぬのます政よ事も報ゆ
うすまのまはうまうまありこま

うらまはよとこのぬの終とあり門を命の

寛保二年八月廿九日

